



一般社団法人アグリフューチャージャパン

# Agriculture Topics

【対談】浦野光人理事長×一期生「就農に向けて」(続)

(1/5)

前号に引き続き、この3月に卒業し、就農した一期生4名 荒木健太郎（兵庫県たつの市）、鍛冶山直樹（広島県広島市）、鋤柄美和子（愛知県田原市）、中瀬健二（熊本県大津町）と当法人理事長 浦野光人氏が、卒業式を前に対談をした際の模様をお伝えします。



（中瀬）先ほど、「失敗すること、新聞を通してシミュレーションをしてみる」とが重要だ」と仰っていました。私たちはそれぞれ20代〜30代です。浦野さんはこの時期、どのようなことを意識しながら人間関係をつくり、仕事をし、プライベートを過ごしてきたのか教えていただけますか。

（浦野）そうですね。幅広い分野から本を選び通勤時間も利用して読書してきました。古典から現代科学まで、もちろん毎日ですね。これは今も続けていることです。

こういう蓄積がどこかで生きてきます。ただ、そういう意味では、けっこう自分に自信があつたところがあつて、他の人から見れば、30代過ぎまでは「謙虚」にはほど遠いところもあつたみたいですね（笑）。

そのような時にちょうど転機がありました。30年ほど前です。みなさんと同じように、自分で発想した事業に対し、会社が出資をしてくれました。その資金で新しい事業を企画しましたが、

正直なところ、5年間ずっと赤字でした。

そのときに勉強したのが謙虚です。謙虚でないと、誰も何も教えてくれません。その事業には、最初から100名くらいの人間が関わっていました。そうは言っても私は30代前半の若造で、その若造の言う通りには動いてくれないわけです。このことが2〜3年経つてからわかりました。

プライベートでは、その時期にようやく子どもを授かりました。その時、病院で看護師さんを見ると、必ず子どもの視線に立ちます。上から子供を見下ろしたりは絶対しません。必ずベッドの下に膝をついて、子どもと同じ視線に立つて話します。それがすごく大事なことだと思います。

その事業では100人の社員がいないと仕事全体がまわっていかないわけですから、全員が共通理解できるような言葉で自分が話さなければダメなんだとその時に気づかされました。

みなさんも今後そのようなことがたくさんあると思います。例えば、地域

※本誌の無断転用・転載を禁止します。

[発行人] 一般社団法人アグリフューチャージャパン

〒108-0075 東京都港区港南2-10-13 農林中央金庫品川研修センター5階

TEL：03-5781-3750 FAX：03-5781-3752



日本農業経営大学校

Japan Institute of Agricultural Management



一般社団法人アグリフューチャージャパン

# Agriculture Topics

【対談】浦野光人理事長×一期生「就農に向けて」(続)

(2/5)

の人たちと話すときに、「私が地域のためにこんなにも考えているのにどうして理解してくれないのか」と言いたくなることも多々あるでしょう。もし理解してもらえなければ、それは「レトリック」で考えないといけません。

「真実の探求」は終わって、その後はその真実を「納得」してもらわなければいけません。納得してもらったとしても、「あなたが言っていることはわかるけど」と言われてしまえばおしまいです。納得してもらったら、今度は「わかった、ちよとやってみるか」となるように「説得」しなければいけないわけです。ところが、その時に「この地域ではそれをやると、こういう問題が起こる」とか「いやいやお金もいるだろう」ということになると、今度はそこに「ネゴシエーション」が入ります。

つまり、まずは真実の探求があり、それに納得してもらい、その後説得をして、交渉がある。そこまでやってようやく仕事が進むわけです。

本当に苦労しながら、そう簡単には進みませんが、発表した経営計画につ

いて、真理の探究という意味では自信を持つているでしょうから、ぜひそれを地域の中、仲間に納得してもらえらうに、その人たちが理解できる言葉で伝えてください。

ただし、納得してもらえたらそれで終わりではありません。今度はそれだけの人の事情に応じて説得していかなければいけません。さらに自治体や農協など、ハードネゴシエーションが待っているかもしれない。でも、これだけ乗り越えて到達できるわけだから、仕事は楽しいですね。

(荒木) どの時代もそうですが、一部だけがどんどん良くなっていて、その後、みんな良くなっていくというようなトリクルダウン的な発想では、貧富の差も広がり、農業もモノカルチャー型になって、多くの人々が農業に関わることができなくなっています。

そういうことが後からわかってくるんですが、何かに没頭している間は、なかなか真理もわからないだろうなと思います。

(浦野) 農業で言えばまさに日本も同じことです。主産地形成ですよ。産地形成が成功し、稼ぐことができて幸せな地域もあります。ずっとそのままではいけないかどうかありません。

むしろ、その反対の「地産地消」という仮説をみなさん立てたわけじゃないですか。そうすれば、物流コストはかからないし、一年中収入があるという発想に立っていますよね。それはひとつの仮説ですから、みなさんはその仮説の検証をこれから実用でやってみようとしているわけです。

例えば、中瀬さんはカライモに集中したとき、その範囲をどこまで広げることができるかがひとつの課題になると思います。今までの、「良いカライモをつくりました。調理の方法はお任せしますよ」という考えから、「良いカライモを、もっとこうしたらおいしく食べられますよ」という提案までして、その範囲を広げていこうとしていますよね。

今、みなさんは自分が真理だと思っことを見つけて、検証に入ろうとしています。真理の探究は、最後まで突き

※本誌の無断転用・転載を禁止します。

[発行人] 一般社団法人アグリフューチャージャパン

〒108-0075 東京都港区港南2-10-13 農林中央金庫品川研修センター5階

TEL：03-5781-3750 FAX：03-5781-3752



日本農業経営大学校

Japan Institute of Agricultural Management



一般社団法人アグリフューチャージャパン

# Agriculture Topics

【対談】浦野光人理事長×一期生「就農に向けて」(続)

(3/5)

詰めれば哲学になります。それは証明もできないし、仮説も立てられないということになると思います。

でも、さつき荒木さんが言われた部分はものすごく大事なことです。私が教養の部分で取っていませんでした。が、「人格主義プラス教養主義」が人間の最終的なものだと思います。

だから、先ほど小さな幸せと言いましたが、小さな幸せはそこそこにして、最終的な目標は「人格の形成」と思えることが大切です。それぞれの哲学はそれぞれが持つていけばいいわけです。

(中瀬) 私は地域貢献には雇用するところが大切だと思っています。これから雇用をしていきたいと思つていますが、今まで一農家としてやってきて、人を雇ったことはありません。これからどうやって人を雇って、リーダーシップをとって、人を成長させていけばよいのでしょうか。壁にぶち当たった場合、どのように解消していけばよいでしょうか。

(浦野) リーダーシップも究極は謙虚

です。ただ、昔と違って、現代の社長は企業の全ての部分でナンバーワンになることはありえません。社長にもわからない部分がたくさんあるわけじゃないですか。

中瀬さんがカライモのことをいくら知つていても、仕事はカライモの栽培のことだけではなくて、その仕事をやっていく上で色々な段取りがありますよね。例えば、従業員の方に1日気持ちよく働いてもらうためにはどうすればよいのかは、カライモのことだけ考えていてもダメなわけです。

そうになると、自分以外のパートさんなど、どんな人に対しても学ぶという謙虚さがないとリーダーは務まりません。そういうリーダーであつて初めてついてきてくれるというのがあると思えます。つまり、全ての人から学ぶという姿勢です。

2つ目として、リーダーは遠い先を示せないといけません。例えば、「来年度この畑からカライモの単収を5%上げよう」という短期的な視点よりも、「将来は今の生産量を10倍にして、他国に

もカライモの良さ、いい商品であることを確かめてもらおう」とか、ビジョンを大きく示すのがリーダーの役割です。

リーダーの役割はまだまだたくさんあります。カライモの生産について言えば、毎日起るであろうトラブルシューティングについては、自分がリーダーシップをとって教えなければいけません。

そのなかで、最終的にリーダーは人々を明るくすることができなければいけないと思います。業績が悪くなつて、リーダーまで暗くなつてしまつたらダメです。いくら悪い状況になつたとしても、明るく振る舞つていこうというのがリーダーの最大要件です。

私はねつからの明るい性格ではないので、社長になつてから一番自分なりに苦労して心掛けたことは明るく振る舞うことでした。ある意味、これが一番苦しかったかもしれない。危機的な状況でも、明るく言い続けました。それはリーダーにとつてとても大事な素質だと思えます。

ところで、みなさんが農業という仕事を通じて、本当にやりたいことは何

※本誌の無断転用・転載を禁止します。

[発行人] 一般社団法人アグリフューチャージャパン

〒108-0075 東京都港区港南2-10-13 農林中央金庫品川研修センター5階

TEL：03-5781-3750 FAX：03-5781-3752



日本農業経営大学校

Japan Institute of Agricultural Management



一般社団法人アグリフューチャージャパン

# Agriculture Topics

【対談】浦野光人理事長×一期生「就農に向けて」(続)

(4/5)

でしょうか。自分に還元してもいいし、他の人でもいいです。やはり、農業が目的になつてしまつてはいけないと思いません。農業もひとつの手段だという視点で見たとときに、どのようなことをお考えになつていきますか。

**(荒木)** 私の就農動機とも関係してはいますが、大学生のときにどこが一番暮らしやすいのか、どういう生き方の方が一番幸せなのかと思ひ、ニューヨークには1カ月滞在しましたし、ヨーロッパなどの大都市も旅行しました。北欧、フィンランドにも行って、そのことについて考えました。

そのなかで、「日本は相当いい場所だな」と実感しました。山や自然も豊かで、トイレなども完備されていて、生活環境にも恵まれています。日本人はこういう環境が生んだ国民性かもしれないと思ひました。それを担保しているのが山と川とこの景色だと思つたんです。それを守ることができなくなつてしまつたら、日本のこの良さが失われていくと危機感を覚えました。日本人の

素養もそこからきているエネルギーだと思つていたので、それを守るには農業しかないじゃないかと考えました。

農業を通じて農村をなんとか守つていきたいと思つています。とくに今は農村に人がいません。コンサルとかはいっぱいいますが、私も一時、農業のコンサルをやろうと思ひましたが、農家がないのにコンサルを仕事にするというのは何だかおかしいと思つたんです。自分で農業を仕事にしていくことを決めて、農業を通じて日本の素養を保つていきたいです。

**(鋤柄)** 私は農業が自分の根底にあると気づいたのが、色んな人たちと関わってきたなかで、やっぱり自分が本当にやりたいことが実家の農業の姿のなかにあつたんだなと気づきました。

ただ、実家のある田原市がとても農業が盛んな地域だと言われても、まだまだ農業者のイメージといったら、普通に企業で働いている人よりも地位が低くかつたりします。

農業は本当に人間が生きていく上で、

食べものという必要不可欠なものをつくつています。食べものをつくる人がいるからこそ、自分たちの生活が成り立っていると思つてもらえるような位置に農業を持つていきたいと思つています。

それと、発表のなかでも言ひましたが、農業を通じて人々がつながり合える場所をつくり、それを地域の発展につなげていき、もう一度地域を見直すことをしていかれたらと思つています。

**(浦野)** 新しい農村像をつくりあげることができればいいですよ。もちろん、古い地域社会像も大切なんですけど、それに何かプラスした新しい農村。そういうのは、鋤柄さんの発表のなかで重々感じていました。

**(鍛冶山)** 私は大学生のときに就職活動をしました。その頃には農業をやるとうと全然思つていませんでした。就職活動をしていくなかで、あまり輝いて仕事をしている人が少ないという印象を受けてしまいました。その中で、自分の親と話していると「かつこいな」と感じ、

※本誌の無断転用・転載を禁止します。

[発行人] 一般社団法人アグリフューチャージャパン

〒108-0075 東京都港区港南2-10-13 農林中央金庫品川研修センター5階

TEL : 03-5781-3750 FAX : 03-5781-3752



日本農業経営大学校

Japan Institute of Agricultural Management



一般社団法人アグリフューチャージャパン

# Agriculture Topics

## 【対談】浦野光人理事長×一期生「就農に向けて」(続)

(5/5)

「自分も農業をやりたい」という気持ちにだんだんなつていきました。

学校に入学してから、再度、自分の地域である広島を見つめ直す機会ができました。東京に出て来て、改めて自分の地域がいいなと思うようになったんです。これまで親がやってきた取り組みをさらに違う形で伝えていきたいなと思っています。

(浦野) それは哲学者に言わせたら、農業を通じて哲学をしたということですね。かつこよく言うところということだと思います。親御さんは60歳くらいですよ。やっぱり、60歳の人がかつこよく見えるというのは、大人として、人間として人格ができていたからです。人格ができていなかったら、かつこよく見えないですよ。農業を通じて人格形成ができるということも大切な視点ですね。

(中瀬) 私も鍛冶山さんと似ているところがあるのですが、父親がかつこいいというのを2代になつて気づきました。

私も「父親より、もつとかつこいい農業をやつていきたい」と考えています。

今まではずつと、「いいものをつくつて農協に売る」というのが全て農業だと思つていましたが、色んなことをやつていかないと消費者は買つてくれないんですよ。

荒木さんは地域資源や景観を活かした農業、鋤柄さんは食育、鍛冶山さんは都市農業、私が6次産業化。消費者が様々なものを欲しがつていて、ニーズが多様化しているなかで、色んなことを見つげられるのが農業だと思つています。

若い人たちにも「農業は、いいものをつくつて売るだけではなくて、色んな取り組みを通してできるんだよ」ということを伝えていきたいです。

(浦野) いいことですね。まさに農業を通じて地域を活性化していくということですよ。

それぞれ計画したことは、本当にやりたいことの手段だと思つていますので、是非がんばつてください。

(文責：小口)



日本農業経営大学校

Japan Institute of Agricultural Management

※本誌の無断転用・転載を禁止します。

[発行人] 一般社団法人アグリフューチャージャパン

〒108-0075 東京都港区港南 2-10-13 農林中央金庫品川研修センター 5階

TEL : 03-5781-3750 FAX : 03-5781-3752